

# 発刊のことば

会長 土橋 寛

昭和四十年十一月、同志社大学国文学会が結成され、ここに機関誌「同志社国文学」の創刊号が発行される運びになったことを、会員諸氏とともに、まず喜ぶたいと思う。

本学会は、会則の第二条にも記されているように、国文学・国語学及び国語教育の研究を目的とするもので、本誌はそれらの研究活動の成果を発表する場所であるが、それは一面では会員の研究活動に何らかの貢献をしようとする意味を持つと共に、他面では広くわが国における国文学・国語学・国語教育の研究に対しても、その一翼を担おうとする公的・社会的な意志の表明でもあるわけであるから、今後の研究活動をどのように進めればよいか、この際みんなで考えてみることも必要であろう。私は国文学の研究に従事する者であるから、問題を国文学に限って、所感めいたことを述べてみたい。

明治以後の国文学の研究の歴史を顧みると、ドイツの文献学の方法と近世国学の伝統を受継いだ芳賀矢一に始まる文献学的研究、次いで文献学の雑学性の批判として起こったドイツ文献学の流れを汲む岡崎義恵の日本文学、さらに文学学、さらには文学学、さらには文学学を批判し、作品を歴史的社会的な人間生活との連関において捉えることを文学研究の中心とした石山徹郎に始まる歴史的社会的な研究、また文学に個人的なものよりも民族的な信仰や伝承の要素を重視する折口信夫らの民俗学的研究、戦後ドイツ・スイスに抬頭してきたいわゆる解釈学派の方法を学んだ解釈学的研究など、研究の動向は幾度かの変遷を経て、現在に至っており、近年はまた改めて文学研究はいかにあるべきかという問題が、しばしば論議に上っている。これは

学としての文学研究が、一筋縄では行かぬ困難な問題を含んでいるからであることは、いうまでもない。

文学研究における困難さの一つは、研究対象としての「文学」が、自然諸科学のように一義性を持たず、存在であると共に価値であるという二義性によるもので、文学が享受者に対して持つ意味としての価値にしても、あるいは人生如何に生くべきかという問いに答えるものとして理解され、あるいは広義の快樂体験、自己充足的、自律的体験として理解される。従って文学研究はその出発点において、「文学とは何か」という難問を背負いこんでいるわけで、むしろこの難問に答えることが文学研究の究極の目的でもあると考えられるのである。

文学研究における学的方法の困難さも、右のことに関連している。文献学、文芸学、文学批評（作品批評）、解釈学、文学史など、文学を対象とする学的方法の必要性と可能性に関する論議は、学者の文学観をめぐって今後も続けられるであろうし、また続けられることが望ましい。そしてわれわれもそのような問題に参加しなければならぬと思うが、抽象的な文学研究の方法論としてだけでなく、具体的な文学研究の中でその問題を考えてゆくことが大切であると思う。

われわれの国文学会は、必ずしも「文学」と「文学研究」について一致した見解を持つ者の集団ではないから、会員各自が自らの文学観と研究方法に従って研究を進めて行けばよく、むしろ独自の方法を示してくれることを期待したい。願わくばどのような研究であっても、「文学」の問題に何らかの拘わりを持つものであると共に、さらに文学研究の意義ないし面白さを教えてくれるようなものであれば、さらにありがたいことである。

人間にとって、とくに人間阻外の傾向の強まりつつある現代の社会において、人間性回復のための一つの重要な場としての文学に関心を持ち、進んで研究に従事しようとしているのが我々であると考えたい。また同じ理由によって、国語教育の重要な任務を自覚すると同時に、その原理的・技術的な諸問題に関する研究を深めることによって、本誌の今後の発展を期待したいと思うのである。